

李恢成

約束の土地



李恢成
約束の土地

講談社

約束の土地

昭和四十八年六月二十四日 第一刷発行
昭和四十八年七月二十四日 第二刷発行

著 者 李恢成

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二／郵便番号一―二

電話東京〇三九四五―一一一（代）／振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定 価 六八〇円



落丁本・乱丁本はお取り替えます
©李恢成 昭和四十八年

約束の土地

装幀
田
村
義
也

その日の朝、重吉ワシギルはいつになく早く目が醒めた。

かたわらの道子ミチコがうつぶせの姿勢で眠っている。肩胛骨が浮き、首がよじれていて寝ぐるししうだった。直してやろうかと思ひかけ、そのまま重吉は妻を眠らせておいた。敏感な女だから、目を醒ましてしまふだろう。

真夜中に、妻はうなつた。乳房をメスで切開されているようなくるしげな声である。ぎりぎりとロープが締っていく音にも似ている。その断続的なうなり声がだんだんと重吉のまどろみを奪い出し、ついには窒息しそうな気分にした。無意識のうちに、

「おい、おい。やめてくれよ」と不機嫌な声をあげ、妻のかいなをさぐつた。すると、道子はハッとしたように瞼をあげ、「うなつた？　ほんと？」と訊ねる。なんでこんな真夜中に嘘をいう必要があるのか。重吉はそう心の中で呟く。

「生理が近づいているんだわ。そのせいよ」

道子は弁解するように呟き、少し躰を重吉から離して、ひたすら眠りに落ちていった。

このところ、また妻のうなり声がはじまったと重吉は思った。どうしても慣れることのできない声だった。水に浸した指の創口から血が吸われていくような薄気味の悪さ。邪険だったと、後悔するくせにその瞬間は夢中なくらいに妻の脇腹を肘でこづいた。さすがにそのときの道子は腹に据えかねて、「やさしくないのね」と怨み、掛蒲団の縁まで髪を埋めていった。なじられると、重吉は寝心地がわるくなる。だが、ヤスリでこすり出すような周波が重吉の安眠を妨害しているのたしかであった。その声をきくと、なぜか自分が責められているような居たたまれなさを覚えるのだ。妻は生理のせいだと説明する。しかし、単純にそうなのだろうか。あのうなり声は結婚当初は想像もできぬものだった。自分が五年前に職場をやめた頃から始まっている。そう、たしかにそうなのだった……

頭が冴えていた。朝の空気が冷たく皮膚を這っている。地面に直接頭をつけているような奇妙な錯覚がおきかけたとき、どんとと地べたを鳴らして足早やに新聞をポストにはさんで遠のいていく男の足音が伝わってきた。重吉はその音に誘われるように曲げていた脚をのばした。すると、踵に固い感触がはねかえった。ダンボールの函だった。昨夜、大童で道子といっしょに詰めこんだ書物が山になって積み上げられていた。部屋が暗く見えるのはそのせいだった。カーテンを引いているので、いっそう暗くもっている。

その闇のなかで、松本浩萬氏の顔を重吉は思い浮べてみた。どうしたのだろう？ ふしぎにもその顔を忘れてしまっていた。闇がくるみこむようにして顔をもっていつてしまっていた。あの表情はいちど会えば二度と忘れられぬような印象をあたえるたぐいのものだった。道子がなにげ

なく「モロッコに行ったらいそうな顔ね」と洩らした顔である。「モロッコのカスバにいけば、或いはという感じだな」重吉も適確な言葉をさぐり出せぬまま、うなずいた。要するに、どこか異邦人の臭いのする容貌なのだ。目鼻立ちのどぎついところが北方蒙古系ノース・モンゴリアンの骨相だと妻は思ったが、そんな説明はどうでも、彼の出は、浦項プク、つまり南朝鮮であった。だが、血筋はもっと複雑だった。それにしても、なぜ肝心の顔形がはっきりと浮んでこないのだろう？ 重吉は触角を折られた虫のような当惑を覚える。少くとも、と思った。彼の表情は印象が稀薄なために紛れてしまったのではない。むしろ、その目鼻立ちの輪廓がそれぞれに際立ちすぎて、かえって相殺作用をおよぼしているといった感じなのである。

「人は見かけによらないものね」

道子がおもわずそう洩らした松本浩萬氏に重吉が会ったのは、一週間前のことだ。わずか七日前に会ったばかりなのに、そしてそのときの印象がきわめて感銘的だったのに、顔を忘れてしまうというのは我ながら奇妙なことがらに思える。

その日、重吉は家族づれでF町に出かけていった。文学仲間である柳春宙リュウチュウの紹介で彼に会うことになったのは借家の件が生じたからである。喫茶店「舎郎房」サランバンは応接間といった趣きのある洒落たつくりの店だった。柳春宙は弟の明宙ミョウチュウが経営しているこの喫茶店で彼と重吉を引き合わせるつもりだった。ゆるやかなアスファルトの坂道に面した舎郎房に着くと、おそらく柳明宙が手彫りでこしらえたと思われるほぼ正方形のモダンな吊り看板が懸っていた。

「なぜ明宙は絵をやめたんだろう？」

ゆったりした椅子に腰を下したとき、重吉はそれとなく訊ねてみた。まだ松本浩萬氏があらわれなかったので、ちょっと気に懸っていたそのわけを聞いてみたのだ。たまたま、明宙は不在だったが、面識はあった。重吉が大学生の時分、同じ年の彼は絵描きを志望してどこかの美術大学に通っていた。それ以来、会っていないかったけれど、最近になって電話でなんとか話している。絵を断念したというのを知ったのはそのときだった。

「いやア、あいつは赤緑色盲とわかったんだよ」

柳春宙が暗くこごった声で弟をかばうようにいった。赤緑色盲、ときいて、重吉は身につまざれた。道子も同じ気持になったのか、つい長男の俊洙を見やって、それとなく次男の哲洙に視線を移した。俊洙は大人たちの会話に興味をしめさず、喫茶店に置いてあったマンガの本に首を突っこんでいた。

「子供が貰ってきた成績表をみたら、身体検査の欄に赤緑色盲と書いてあったんで、まさかと思ったがね。この子もそうらしい」

心もち重吉は子供の様子を気にしながら喋った。道子が「私のせいなのね。染色体の関係から……」といいかけて口をとぎした。急に俊洙が顔をあげて不安そうに母親を見つめ、それからいっそうマンガ本に上体をかたむけていったからだ。

松本浩萬氏は約束の時間にあらわれなかった。忙がしい人だから、やむを得ないことだった。

仕事の合間を縫ってわざわざやってきてくれる感じが重吉のなかで自然とできていたのは、柳春宙からあらかじめ聞かされていた知識のせいだったろう。

これから会う人物は従業員を十何名使っている工務店の社長で、兼業として旅館の経営にも乗り出すなどかなりの実力家らしかった。都心のビルにも事務室を借りうけていて、ゆくゆくは都内にもシェアを拡げる腹づもりとのことなのだ。

「そのうち、彼の会社が大きくなったら、こっちにも資本を出させるさ」

柳春宙がそういったのは三日前の午後だった。その目論見が、まだ借金の残っている舎郎房の方に融資させようということなのか、本代でも捻出させようという腹づもりなのか、重吉にははっきりしなかった。

その時、二人は松本浩萬氏が遊ばせている彼の家を下見にいった。ヴェランダのある家だった。大きな榆の木が二階建の家の屋根に梢をひろげていて、夏が涼しそうだった。重吉は家の立派な造りをチラッと思い出しながら、松本浩萬氏が喫茶店にあらわれるのをひそかに心待ちしていた。彼に好感を抱かれないというさもしい感情が掠めていく。道子にもそんな気持があるせい、いつもより眼付が冴えているのに重吉は気づいた。自分の浅ましきは柵に上げて、なんとなく重吉は情ない気持になった。

勿論、二人ともはしたない態度はとるまいと自分に言いきかせているところがないわけではない。貸す貸さぬは先方の意志ひとつだが、借りるか借りぬかの選択もあってよいわけだろう。ただ、入居条件がよすぎるのに幻惑されて、二人のそんな心構えはだらしく崩れていきそうなところがあった。独立家屋は部屋が五ツあり、車庫までついていた。自家用車のない重吉達にとって車庫などは無用の長物のはずである。それなのに、ヴェランダが晴れがましい感情を誘い出し

たように、車庫も重吉の虚栄心をゆるやかにくすぐっていた。そんな家が家賃三万円で借りられるのだから、冷静を装おっていても、やはりどこことなく落着けない。しかも格安の家賃にくわえて、権利金もいらず、敷金が十五万円だけというのはどうみても、結構ずくめであった。

普通ならこんな三拍子そろった話は却って訝かしくなってくる。重吉とていったんはそう思わぬではなかった。しかし三日前に柳春宙がその訳を説明してくれたとき、だんだんと納得がいった。

「彼は朝鮮人の役に立ちたいんだよ。二重国籍者なんだがね、朝鮮人と日本人の混血らしいんだ。それを俺に洩らしたのは知り合って暫くしてからさ。最初、舎郎房にコーヒーをのみにきけた頃は、てっきりどこかの日本人のオッサンくらいに思っていたんだな。ところが、へんに親しく話しかけてくるんでまあそれから付き合ったら、『先生、ワタシも同じ国の人間ですよ』と言いついてさ。『なんだ、そうか』ってことになり、いろいろと話しているうち、家を二軒持つていてその一軒を遊ばせていることもわかってきたんだ。利用してくれっていうから原稿書くのに使ってたけど、たまたま君から安い家はないかと頼まれていたのを思い出して彼に相談してみたんだな。そうしたら、はじめは警戒してしぶっていたよ。それでも『先生が保証人になつてくれれば』とOKしたから早速、君に来て貰ったわけだよ。長いこと彼は自分が朝鮮人つてのを隠して暮してきただけに人間にたいする警戒心もつよいがね、淋しくもなっているんだな。年と共に里心づいたっていうのかな、とにかくそんなわけで、べら棒に安く貸す気であるところだから、タイミングははずさない方がいいよ」

好意のこもった電話だった。重吉はその話を道子にもきかせておいた。重吉は自分達のために労を取ってくれた柳春宙にすまなく思っているのも、この家があまりにも魅力的に映っていたからである。

まもなく、松本浩萬氏が舎郎房に姿をあらわした。

彼は真白な開襟シャツを着て、小脇に手提カバンを挿んだ格好で近づくと、腰をかがめるようにして重吉のななめ横に坐った。顔に精いっぱい微笑をたたえているその様子は町の社長さんというより、律義な集金人といういで立ちだった。彼はやや緊張気味な重吉や道子よりもいっそうへり下ろうと努めているかのごとく、膝頭をそろえていた。膝におこつな手を載せて、しきりにさすり合わせている。重吉はその手の險しい気配にひそかにおどろかされた。握力の強そうな筋肉、ひび割れた手の甲と鈍感そうな爪の形、節くれだった関節、それらには地球の熱さを握ってしまったようなつらさが感じられた。

つい松本浩萬氏の顔を見あげたほどだった。この人間が家を貸そうとする当人なのかと疑わしくなった。松本浩萬氏は満面に微笑をたたえていたが、その眼にはなぜか笑みを繕いつづけているような暗い翳りがゆれていた。凄惨な眼をしている、と重吉は思った。そして、なぜかその眼が重吉の下心を見透そうとしている気がしてきて、しぜんと顔が赧あかくなった。

重吉はどもりがちに自分達がいま安く貸してくれる家を探しているわけをのべ、出来るものなら好意にあずかりたいといった内容の話をした。その際、自分が小説を書いていると告げたのはいわずもがなであったが、すでに柳春宙がそんなことも材料としてそっくり伝えてある気配だっ

たので、とくに秘すこともなかった。

「はい、はい」松本浩萬氏はどこか舌足らずの甘い声で聞いていた。それからおもむろにコーヒーを体裁ばかり舐めてから、

「私の家は、もう見ましたか？」と訊ねてきた。

「数日前、私と一緒に行ってざっと見てきましたよ」柳春宙がぶっきら棒に答えた。

「そりゃ手間が省けていいですね」

相変らず、松本浩萬氏は微笑をたたえていった。その声の気配で重吉はホッと、腕や肩からざごちなさがぬけていく気がした。

「もし、よければ、貸していただけませんか。そうすると、助かるんですが」

重吉が鹿爪らしく頭を下げると、道子まであわててお辞儀をした。

「いえいえ、そんなにしなくても——」

松本浩萬氏はぶこつな手で制してから、ふっと真面目に考えこんだ。その表情を重吉は見つめた。やはり、凄惨な眼をしていた。浅黒い顔の右頬に小豆ほどのホクロがあったが、そのホクロが愛敬として映らぬほど、顔の中に異様な光が感じられた。

と、彼は揉手をはじめ、謙虚な、ほとんどおずおずした態度で、

「私はべつにお銭が欲しくて家を貸そうというんじゃないやありません。それは判って貰えるでしょう」と、呟いた。勿論、その気なら、彼は家賃を二倍にしても不当とはいわれないだろう。

「お金じゃないんです。ええ、敷金は一応十五万といいましたが、いま聞いてみますと、失礼で

すがあまり楽でもない様子ですし、ええ、五万円で結構です。家賃の三万円、これはいりません。もしそれでよければ、どうぞ、明日からでも使ってください」

松本浩萬氏は自分にうなずきかける口調でそういった。おもわず重吉は道子と顔を見合わせ、いそいでかぶりを振った。

「いえ、それは何ぼなんでも。けっして、そんなつもりで……」

道子も下の子供の哲珠を掻き寄せるようにしてうなずく。その二人の様子を好ましそうに眺めて、松本浩萬氏がおもむろに口をきいた。

「こう言っちゃ何ですが、私のこの気持は先生方にやよくわからないでしょう。私は朝鮮人といってよいかどうか曖昧な男ですが、四十をとくに過ぎて父さんの死んだ年に近づいてくると、何か故国のために役立ちたいと思うようになったもんです。そりゃ、これまで朝鮮人を憎んできましたよ。いろんな事情がありましたしね、はい。まあ、いつか機会があればお聞かせしますがね。でもそれはそれですよ、私は今では改悛していますし、少しは世間に顔向けできる——そんなことも出来ないでしょうが、ちょうどこちらの先生からあなたさんの話が出たときに若い同じ国の人に少しでもお役に立てればと、そのように考えたんですよ。いえ、私もそりゃ商売もしますから、始めは世間並みの権利金、敷金も頂戴しようと思わなかったといえば嘘になります。でも、会っているうちにそんな気もなくなりました。失礼ですが、あなたさんが気に入りましたよ。それに安心してお貸しできる人なら、私も大助かりってわけでしょう。ええ、ですから、家賃は留守番代のつもりになっています。あの家で人様の役に立つ仕事をしてください。それが私

への家賃ですから」

重吉は画映おぼゆくなり、しだいに顔を俯向けていった。そして、松本浩萬氏の手にじいっと視線を注ぎながら、どんな顔が火照るようで、眼に痛い痛みを感じた。角質化した彼の指先はカミソリでそれでもなかなか血が滲まぬような厚さを感じさせる。だが、その皮膚の下を流れているものが重吉を火照らせた。

「それではちょっと虫がよすぎますから。気持はとて有難いのですが、いくらかでも家賃を払わせてください……」

そんな風に話が進んでいった。双方の遣取りを押し黙って観察していた柳春宙が、
「なんだ、これで話が決ったようなもんじゃないか」と、ケリをつける口ぶりで洩らした。

結局、一万円の月決めで話がまとまったのである。敷金も五万円にまけてくれた。感謝の気持ちをしめす重吉達の熱っぽい視線をうけながら、松本浩萬氏はかたわらの手提カバンを小脇にかかえ、低く頭をさげて先に出ていった。

その時から一週間経っている。なぜ、松本浩萬氏の顔を憶えていないのだろうか？ 重吉は奇妙なおもいで、薄暗闇に目を凝らしていた。すこしずつ朝陽がカーテンごしにダンボールの隙間から差しこんできた。ふと、重吉は部屋の暗さがほぐれぬ間に彼の表情を思い出さねば、何かがついに見えなくなってしまうような焦りを覚えた。それもへんな心理だった。

朝日が部屋のなかの煙ったような暗がりを光で溶かしていくにつれ、長押ながしがきれいに浮んできた。壁や長押に釘を打ちつけては困るという入居の条件がだいお前から苦痛になっていた。本が

増えてくると、六畳・四畳半の間ではかなり窮屈であった。育ち盛りの子供達がしょっちゅう仕事の邪魔をするようになっていた。

重吉はたばこを吸おうとして寝がえりをうった。わずかなその気配で、道子の髪がゆれ動き、すうっと蒲団のなかから枕元の置時計に腕が伸びてきた。ワン・タッチで置時計に触れる技術をもっている。一瞬、重吉に時計をずらしてやろうかと悪戯心が湧いたとき、彼女はもうそれに触れてしまっていた。

「六時——」と、道子は枕からずれた顔を少しもたげて呟き、

「あら、起きてたの」と、肘を立ててたばこをくわえている重吉に声をかけた。もっそりと彼女はその場に膝をくずして坐り、寝巻の合わせ目からのぞけている太腿をボソボソとものうげに掻いた。寝ぼけていた妻は頭をひとふりしゃくってから敷布の襷にはまりこんでいたピンをつまみあげ、ひとつひとつ髪に差しこみはじめた。それにつれて声に張りが出てきた。

「九時だったわね、トラック。そろそろ起きて後片付けしなくちゃ」

敷蒲団からずり下りた道子はすばやく着がえはじめた。破れ襖を明けて居間に出ていった道子は子供達の寝相の悪さに嘆声を洩らし、それから台所に入っていた。

「カチャッ」と、ガスの栓をひねる音が響いた。

毎朝その音に慣れていた。一日が始動する最初のスイッチであった。それは金属音よりも道子の生活のリズムを感じさせる。五年前とその後にもなんらの狂いがないテンポ。自分の方は、と重吉は思う。ずいぶんとあの頃にくらべて生活に変化が起っていた。

朝起きる時間から違ってきている。あの頃は六時には蒲団をたたんだ。それから気ぜわしく朝食をすまし、六時半には家を飛び出していった。民族新聞社の会議室で八時から始まる朝の学習に遅れないようにと朝食を省略していくこともあったのだ。しかし、いまの重吉はその職場を離れている。それにつれて生活のリズムもずれ、深夜まで起きていて朝の今どきには眠っている日もおおい。

「悪いけど、半には床を上げてね。でないと、準備が間に合わないわよ」

道子が台所から声をかけてきた。

「うん」生返事をして、重吉はそのまま蒲団のなかで温もっていた。道子の性格にあるこだわりが今朝などはよく出ている。だが、引越しもなると、重吉の方では今更のように気が重たくなって、それを口実のように蒲団にくるまっている。

結婚してから、これで三度めの引越である。いずれも五年前に職場を思いきってやめてからのものだった。それまではどっしりと朝鮮人の寮の中に住みついていてた。同僚達との共同生活がなつかしい。もっとも結婚をひかえた二人がはじめてその朝鮮人寮を探していったとき、重吉はいささかがっかりした。建物は荒れ放題で、軒がかしいでいたから。道子の方がまるで拘泥^{こだ}わらなかった。重吉はこの建物が昔は遊廓だったということにも生理的反発を覚えた。まさにつわものどもが夢の跡だ。縁の下の土台から柱がすこしずつれているのを見て不安な気がした。地震がやってくると、最初の一撃でペシャンコになりそうである。濛々と吹きあげる土ぼこりのなかに白粉^{おしろい}の匂いがふかふかともっていきそうだった。